

氏 名	Whittle John Michael Franklin
学 位 の 種 類	博士 (美術)
学 位 記 番 号	第 78 号
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論 文 題 目	Romantic Objectivism Diagrammatic Thought in Contemporary Art
審 査 委 員	主査 教 授 松井 紫朗
	教 授 井上 明彦
	教 授 小山田 徹
	教 授 石原 友明
	Charles Worthen (広島市立大学芸術学部教授)

## 論 文 の 要 旨

本論のねらいは、芸術におけるダイアグラムの美学の発展と可能性を描写することである。それはアーティストが、ダイアグラムのユニークな性質を利用する、様々な策略に頼ることによって、その作品において、独特の主観と客観の共鳴を達成させるものだ。結果として生まれる作品は、私がロマンティックオブジェクティビズムと呼ぶところの、科学的探索にある知的な厳格さと、芸術にある官能的な、象徴的ニュアンスを併せ持ったものになる。

この研究は、ダイアグラムが人間の視覚コミュニケーションの基盤となる様式であると位置づけるために、序説としてその史前と歴史を導入している。しかしそれは芸術における重要性という意味では見過ごされてきたものである。

ダイアグラムの哲学的な分析は、それと科学における技術・目標との関係が、今日関連づけられているような、洗練され、概略化された連結性の美意識の創出をどう助けたかについて示すことを目指している。

鍵となる作品例、評論、マルセル・デュシャン、ソル・ルウィットら、20世紀の主要なアーティストのインタビューは、ダイアグラムやダイアグラムの思考とのごく基礎的なレベルでの芸術的、また哲学的な関わりが、アーティストにモダニスト期におけるいくつかの大変重要な、そして影響力のある作品をつくらせしめたと言う見解を支持するものである。

本論はまた、私の過去十二年の実習からの代表的な作品と、鍵となるロマン派からの象徴的なテーマとを対比させながら、ダイアグラムのオブジェクティズムにおける、私自身の象徴的語彙の開発について言及する。これらは景色、自然の中での人間の活動、象徴的な樹、象徴的鳥、また、人間の形態の描写である。このようにして、私は自分の作品を、我々の現代における自然との関わりについての、ロマンティックオブジェクティズム的な黙想として提示している。それは科学的ダイアグラムの禁欲的な孤立と、ロマン派的な風景に対する重要視、そして個人の主観的な表現との合体によってなされるのである。

私自身の製作活動を、現代のダイアグラムの美学の分野において位置づける為に、本論はダイアグラムの形式をもちいて制作しているアーティストの、数多くの他の作品例を視覚的に位置づけ、理論化する。本論はこれらの作品が、それらに共通の美学のみでなく、その芸術的目標とも言える詩的 (poetic) な面 (語源 poetica: 作品の芸術的目的) という意味で、どうつながり合っているのかを精査する。

## 審査結果の要旨

私たち人類の経験が概念化、図表化され、何かを伝えるコミュニケーションのツールとなる。時には物質と共に組織化、構造化され、ボディーを持つこともあるのがダイアグラムだとすると、人間と環境、そして天体との間に組織化された関係を確立した石器時代のストーンヘンジや、狩猟対象のシカやアイベックスを複雑な記号的風景として石の地図に記した旧石器時代にまで、その存在を求めてさかのぼることができる。しかし、ダイアグラムはこのようなツールとなって確立したところが終着点ではない。ツールとして、もとある文脈から切り取られ、図表やモニュメントと化した、星や、シカや季節などと、図像化された経験は、過去の出来事を思い返させたり、儀式として言い伝えを残すだけのツールとして存在するだけではなく、未来のことを計画したり、学習したり、様々な問題が組織化され考慮されることを知らず知らずのうちに準備を促すエンジンとなる。ダイアグラムは、このような観点から見ると、表意文字やピクトグラムの創造など、人類の抽象的な思考に欠かせない発明や、言語の発展、更には、科学革命に於いて必要不可欠な役割をになうことにもつながっていったと考えられる。もっと積極的な捉え方をするならば、発生からして天然のエンジンとして人類をひとところにとどまらせるのではなく、動くように促しつづけるのがダイアグラムの特性といえる。このようなダイアグラムのもつ性格、秩序化と無秩序化、文脈からの切り離しと再配置、主観と客観のスイッチをうながしつづける性格は、芸術的な活動、創造活動そのものと考えられる。これについて、マイケル・ウィッテル氏は、「**Diagrammatic Aesthetic**」「ダイアグラムの美学」と定義し、ダイアグラム研究の中で、本来議論されなければならない領域とする。

ところで、ダイアグラムの概念を巡ってのカンファレンスやシンポジウムは、今世紀に入ってから活発になる。特に 2006 年以降、グーグルをはじめ、コンピュータ関連の企業がスポンサーとなるようになってからは飛躍的な発展を遂げる。抽象的な概念の視覚による伝達や、人工知能の研究など、科学分野でのこの研究の有用性が明らかになるにつれ、**Diagrammatic** として独立し、発展しつづけている。一方、それまでのフランス哲学を基礎とするダイアグラムの研究は、**Diagrammatology** として、抽象的、哲学的な概念をあつかう。このような状況の中、ダイアグラム研究のシンポジウムで、芸術とダイアグラムについての議論は、ようやく、デザインや建築という限定された領域でおこなわれるようになったもののまだまだ十分ではない。また、近年、**Diagrammatology** を中心に展開された、哲学の理論を限定的に作家の制作プロセスや美術史の研究にあてはめようという試みがなされたことはあったが、ダイアグラムの、有史以前の人類の活動から、現代のアーティストの制作活動への幅広い関与について、あるいは、美術史における様々なムーブメントについての関与についても、ほとんどなされていないのが実情である。それを現代のダイアグラム研究に存在している欠落と氏はとらえる。氏の研究は、この状況に於いて意義あるものとなる。

氏は、「**Diagrammatic Aesthetic**」の性格を言い表す言葉として、「**Romantic Objectivism**」をあてる。プラトン哲学の伝統を受け継ぐヨーロッパの観念論は、イデア的原型とも言えるような理想世界をまず想定する。そのことによって科学的な発見と実証が進められ、知見の蓄積が可能となる。たとえば、15 世紀から 16 世紀にかけてのガリレオを筆頭とする科学的発展と幾何学的ダイアグラムの関係の重要性を示す研究を紹介しながら、その美的側面について、徹底した客観主義、あるいはそのような態度に潜む、理想主義、ロマンティシズムの存在を指摘する。厳格な遠近法の中にそれと拮抗するような、躍動感

あふれる幾何学的構図を潜ませるダ・ビンチ、ニュートンの純粋科学による光の分析とゲーテの人間の感覚が紛れ込む光の分析、その結果生まれる色相環との比較、パースのタイプとトークンそしてトーンという概念と、コンセプチュアルアートの制作プロセスなどなど、具体的に科学者、哲学者、芸術家とその仕事をとりあげながら、ダイアグラムという概念が内包する徹底した客観主義とそれへの希求的態度がもたらすロマンティックな美意識について「Romantic Objectivism」と形容する。そして、これらダイアグラムの美意識を自覚的、積極的に「Diagrammatic Thought」として制作プロセスに取り込む現代のアーティストたちの作品と自身の制作を紹介しながら、現代のダイアグラム研究に欠落している「Diagrammatic Aesthetic」について、領域を超えた他分野にまたがる議論の開始を提言するのが、氏の研究の目指すものである。

この研究内容に則し、大学会館ホールに於いて氏がこの3年間に制作してきた作品10数点が展示された。展示は、主に円筒状のホールとその周りの回廊スペースに分けられる。ここでの展示全体を占める特徴は、氏の論文の中で述べられる、パースによる記号論とダイアグラムの研究の中で使われる、タイプ、トークン、トーン、テューオンという概念の、立体と平面、個々の作品への、そうした複数の作品間への、そして会場全体への氏自身の解釈と「具体的な作品展示」というかたちでの実践となっているという点にある。まず目に入るのは、メインホールの中空につられている木造の船、カヌー、浮かされた床の上に配置される、やけこげた木造の屋根の下にある、これも焼け焦げたビニルパイプで構成された目と脳のモデル。枯れ乾いたすすき、丸太が組み合わされたたき火場。言葉や言葉がもたらす象徴的概念、作品のもつ量感や木という素材の質感、あるいは、イラストレーションのようなドライな図表的表現、そして黒々と焼け焦げ、乾いた感覚。それらが時にはタイプとして、トークン、そしてまたトーンとして読み解かれながら、最終的には鑑賞者それぞれの受容器と共鳴しつつ、それぞれにとってのテューオンとして受け止められ立ち上がる。これを支援するのは、一見、自然史博物館的な展示である。

氏自身が、論文の中でダイアグラムの美学が最も発揮されていると目する、啓蒙主義時代の百科全書編纂での法則、背景から切り離され、アルファベット順に並べられることにより起こる、活発な相互関係と他所参照の法則が援用されている。鍵となるのは、中空に置かれ、吊るされる、フローティングである。鑑賞者がこの大学会館ホールの2階回廊に上がり、見下ろす視点になった時には、今まで見上げて見ていたそれぞれの作品の関係性は一変する。この大学会館全体の作品構成、組織された展示のダイアグラム的内容は、より強調されて受け止めることができる。

このように、論文では、考古学、科学、哲学、美術、博物学などの事例を時系列に具体的に分析しながら、現代のダイアグラム研究に欠落している「Diagrammatic Aesthetic」についての論議、その存在の在り処と重要性について説き示す一方で、論文から導き出した「Diagrammatic Thought」を自覚的に自身の彫刻、絵画作品制作に用いる氏の研究は、十分な説得力があり、制作を手掛かりに理論研究を推し進める本学の博士課程の研究の成果と認められる。今後、この成果は、世界的なダイアグラムのシンポジウム、研究会議で取り上げられることにより、科学、芸術、哲学の領域を跨ぎ、関係づける議論をスタートさせ、また、哲学者とメタフィジシャンにより展開する、創造的で刺激的ではあるが抽象的なDiagrammatologyにも具体性をともなった問題提示として評価されることが期待される。